

随想随筆

國學院大教授

井上 順孝



「共感」という脳の仕組み



井上 順孝氏

ウェブサイトで視聴できるTEDトークという面白い番組がある。1984年に設立されたアメリカの非営利団体が運営していて、様々な新しいアイデアの紹介などがなされている。脳神経科学や認知科学系の研究者も数多く登場するが、有名なキリスト教伝道

宗教と科学

師のヒリー・グラハムに語らせたりもしている。

V・S・ラマチャンドラは脳神経科学の分野ではよく知られた研究者であるが、彼が2009年のTEDトークでミラーニューロンについて説明したとき次のようなことを主張した。

かつてC・P・スノーはサイエンス(自然科学)とヒューマニティズ(人文科学)は二つの文化であり、両者は決して交わらないと述べた。しかしミラーニューロンシステムは、意識や自己表現や何が人と人をつなぐの分野においても、この

師のヒリー・グラハムに語らせたりもしている。

V・S・ラマチャンドラは脳神経科学の分野ではよく知られた研究者であるが、彼が2009年のTEDトークでミラーニューロンについて説明したとき次のようなことを主張した。

かつてC・P・スノーはサイエンス(自然科学)とヒューマニティズ(人文科学)は二つの文化であり、両者は決して交わらないと述べた。しかしミラーニューロンシステムは、意識や自己表現や何が人と人をつなぐの分野においても、この

師のヒリー・グラハムに語らせたりもしている。

V・S・ラマチャンドラは脳神経科学の分野ではよく知られた研究者であるが、彼が2009年のTEDトークでミラーニューロンについて説明したとき次のようなことを主張した。

かつてC・P・スノーはサイエンス(自然科学)とヒューマニティズ(人文科学)は二つの文化であり、両者は決して交わらないと述べた。しかしミラーニューロンシステムは、意識や自己表現や何が人と人をつなぐの分野においても、この

れは好ましくないと思う人は少なくないのだから、実際にはスノーの指摘は、現代の日本においても的外れとは言えない。しかし、そうは言っておれないような事態になってきている。

ミラーニューロンというのは、96年にイタリアのG・リッツォラッティがマカクザルの脳神経細胞を調べ

ていたときに発見したことをきっかけに話題になった。人間もまた自分の行動や状態と他者の行動や状態に同じように反応する神経細胞があることに注目が集まった。

これは共感という人間の最も特徴的な営みの一つに関わっていると考えられるから、当然ながら、宗教儀礼や実践のなされ方、あるいは信仰共同体の存続の理由といったことにも関わる。二つの文化などと突き放した言い方では済まない時代に突入したのである。

随想随筆

國學院大教授

井上 順孝

- ①
- ②
- ③
- ④

神がかり体験どう理解？

1980年代後半に『新宗教事典』を編集しているとき、教祖の「神がかり体験」をどのように記述するか、頭を悩ましたことがある。各教団にとっては、教祖の体験は疑うべくもなく神との接触の場であったと理解される。だが、研究者はそれをそのまま受け入れるわけにもいかない。

それより10年ほど前になるが、奄美大島でユタに話を聞いたことがある。またかつてユタであったが、キリスト教の信者になったとされている高齢の女性に話

意識の研究

を聞いたこともある。本人のリアルな体験を聞くと、これをどう記述すべきか一段と悩みは深くなる。

事典のときもそうであったが、論文等でこうした現象をするとき、結局のところ「とされている」とか「とされている」というふうに、事実の真偽に直接触れないような記述をしてきた。しかし、本当は記述の形式の問題ではなく、その現象を実はどう思っているかが肝要である。

まさに当人の言っ通りのことが起こったと信じる信

あまりいない。

しかし、この問題をさらに一歩進めて考察するようになりつつある研究がある。それは宗教研究の分野ではなく、脳神経科学などと総称される分野における意識についての研究である。

意識の謎については、宗教心理学の分野で、すでに1世紀以上にW・ジェイムズが重要な見解を提起している。「意識下の意識」という考えである。これが回心という現象に適用されたが、意識としてあらわれるものが逆転するという発想は、非常に興味深い。

意識の問題は20世紀末からの脳神経科学の急展開で、きわめて微細なシステムへの究明へと向かっている。そこでは意識と呼ばれてきたものの頼りなき、逆に無意識と称されてきた部分の複雑な作用が垣間見えるようになってきた。

随想随筆

國學院大教授

井上順孝

1 2 3 4

自他分ける境界線がない

初回に紹介したTEDトークという番組には、J・B・テイラーという女性の脳神経学者による興味深い体験談もある。

1996年のことであるが、彼女は自宅で突然脳卒中の発作に襲われ、左脳が機能しなくなった。辛いなんとか同僚に電話が通じ、手術とリハビリにより回復するが、発作に襲われたときの様子を振り返って詳しく語っているのである。

脳神経学者であるので、まさに自分の脳の機能がどのような状態になったかを

右脳の世界

冷静に分析している。左脳でできない部分もある。その機能が失われたとき、世だ宗教研究者なら容易に境界がどのように感じられたつかれるであろうが、それを具体的に語る。右脳はラーの語る内容は神秘主義自分と他との境界線を区別の語りとの類似性が多い。言わないと言っているのである。

言つなれば、「我と汝」確かに定まっているかのようを分けるのが左脳の働きな思い込み、あるいは心で、右脳は分けない。通常中に確固たる境界線をもつはそのバランスで生きていた自我があるといったようだが、左脳の機能が失われな考えは、神秘主義において彼女は、否応なく自分とて、しばしば放棄が迫られ他との境界のない世界へ迫る。そつでないかと神との合いやられたとつことにな一も達成できないし、宇宙との一体感も得られないと

彼女の体験がどれほど普遍的なものか、まだ即断だからといって、神秘主

義は右脳が本来果たそうとしていた機能に対応するものだと結論するのは、やはり短絡的に過ぎる。それでも、この符合は押さえておく必要がある。そつだ。

自分の身体と意識の境界線は明確に定めたといふ左脳の機能と、その境界線は本来ないものとして振舞う右脳の機能といふのは本当に普遍的な現象だろうか。もしそうなら、人類の脳は自分の存在についての対立しつつも相補い合う二面性をとつて知って、しっかり役割分担をしていたといふことになる。

個の生存にとつては、境界線を明確に確定する必要がある。しかしそれが仮に確定であることを、科学的要素をもった古代の宗教家は見抜いてしまった。

それをたとえれば諸法無我、諸行無常と表現したのではと、考えるのはどうだ

随想随筆

國學院大教授

井ノ嶋孝

1 2 3 4

「特別な意識」根拠はどこ

意識についての最新の研究をしている一人がC・コッホである。「意識の探求」などの書がある。コッホは、意識はどうやって生まれるのかという難問に立ち向かっている。

ある特定の意識感覚を引き起こすのに十分かつ最小のニューロン集団とその働きをNCCと名付け、これを発見しようとしている。すこぶる専門的な話であるが、こうした議論に接すると、どうしてある意識が生まれるのか分からないの、宗教的意識のみ特別な

信仰

生成のされ方をするなど論じる気にはなれない。

宗教研究では宗教意識というような言葉が普通に使用される。この場合、たんに宗教に関わる意識という意

味ではなく、他と異なる特別な内容を持った意識のよ

うに用いる人もいる。それは宗教自体が特別な現象であり、他と明確に異なる現象であるという前提があるからと考えられる。

聖と俗というような言い方が代表的であるが、宗教と宗教でないものとの間に明確な境界があるという思

考法は、魅力的ではあるが、宗教を信じる人とそうでない人との間に越えられない溝を感じたりする場合

には、とくに誘われてしまう説明である。だが、宗教と呼ばれている現象は多様で、そこに宗教と宗教でないものとの明確な境界線を引くことなど

到底不可能である。それができると考えている人は、特定の宗教のみを宗教と認めている人か、実際の信仰の現場にあまり足を運んで

いない人ではないかと思

一神教と多神教の違いなどを持ち出すまでもない。神社で良縁祈願する。原宿の占い師から幸運を招く方法を教えてもらう。心理カウンセラーに祟りへの不安の解消法を求める。宗教系学校で、宗教科の教師に悩みを相談する。

ここに宗教の境界線を引き出すのは、仮の区別以上の意味はないだろう。それを決める権限を、誰が持つのか。信仰と呼ばれるような意識だけが、他とは異なる性格のものに見えるか。根拠はどこにあるのか。

それでも、仮の境界線が必要に思えるのは、宗教研究という学問分野があるからだけではない。人間の意識と行動とが他の動物とどう違うのかを考えると、仮初にも宗教的と名付けてきた現象は、そのもつとも特徴的な例を集中的に観察できそうだからである。